

周囲に響く、壊れたような笑い声。

「無様なものよ・・・！これが雷禪の息子と、軀の筆頭戦士かえ？」

その声の主を不快そうに見る幽助、飛影、ぼたんの3人。黒夢へ調査に来た新・霊界探偵一行だったが、幽助の1人走りによって敵の罠にはまっていた。罠というよりも、敵である闇麻呂が作り出した『闇沼』に幽助、飛影、ぼたんがはまっていた。

「だぁぁ～ムカツク！抜けろったら、抜けろ！」

「馬鹿が・・・無駄だと言っただろう。」

「なに諦めてんだよ、飛影！？俺は螢子と結婚するから死なねえよ！」

「婚約できただけでも幸せだろう？」

「肉体関係も結べてねえのに満足できるか！！」

「欲深いな・・・まるのでこの沼のように底深い。」

「オメーに言われたくねえよ！てか、お前から勝ち組セリフを聞きたくない！！」

闇沼に沈みながらも、喧嘩をやめない幽助と飛影だったが――

「幽助え！あたしやもうだめだよお・・・！」

ぼたんの言葉で、喧嘩は中断する。

「だから諦めるなって――」

そう言いかけて口を閉じる幽助。ぼたんの体は腰の辺りまで沈んでいた。

「ぼたん！」

必死で体を動かし、ぼたんの手を掴む幽助。

「大丈夫か！？」

「ありが・・・てっ！？あんたの方が大丈夫じゃないよ！」

「へ・・・？げえええ！？」

ぼたんの言葉に、幽助は自分の体の異変に気付く。

腰の辺りまで沈んでいた体が、胸の辺りまで沈んでいた。

「なんじゃこりゃあー！？」

「ホホホ！動けば、動いた分だけ沈むのじゃ。」

「そんな・・・！」

闇麻呂の言葉に、ぼたんの顔色が変わる。

「ごめんよ幽助！あたしがあんたを呼んだばかりに・・・！」

「馬鹿野郎！ダチを見殺しに出来るか！」

そう言うと、ぼたんを自分の肩に乗せる幽助。

「幽助！？」

「これで俺よりは先に沈まねえーよ。」

「なに言ってんだい！？それじゃあ、あんたが——」

「俺は元・皿屋敷中ツッパリNo.1兼、暗黒武術会優勝者チームの大將兼、魔界統一トーナメント3回戦出場選手だぞ！？そんでもって、魔族だコラ！女一人守れないでどうすんだよ！？」

「なに、なに言ってんだよ・・・！」

「心配いらねえってことだよ！」

自信満々で言う幽助に、ぼたんの目頭は熱くなった。

「馬鹿だよあんた・・・馬鹿助・・・！」

「生きて戻れたら、お前ダイエットしろよ！少し重いぜ。」

「幽助・・・！」

ウルウル顔でぼたんが顔をあげた時だった。彼女は小さな叫び声を上げる。

「飛影が！」

「どうした！？」

「あ、あたしより飛影が！！」

そう言われて飛影の方を振り返る幽助。

「でえええ——！？飛影！？」

「ひえー！？」

「……。」

幽助とぼたんより背の低い飛影は、首の辺りまで沈んでいた。

「オイオイ、ヤバいぞ！」

「ひええ〜い！飛影！！」

「ちくしょー飛影！！」

ぼたんを肩に乗せたまま、闇沼をかきわける幽助。

「……来るな。」

そんな幽助に飛影は、鋭い言葉をあげる。

「飛影！？」

「貴様はぼたんを守っている。こっちへ来るな……！」

射抜くような鋭い目で、幽助を睨みつける飛影。

「なに言ってるんだよ！？」

「そうだよ！あんたタダでさえ小さき——！ああ！？顎まで沈んでる！！」

慌てる2人に、飛影は視線を横に向ける。

「来るな！これ以上動けば、お前達が先に沈む……！」

「飛影！？」

(なに言ってるんだよ……！？)

「見ろ、お前達の沈むスピードが速くなっている。」

飛影の言葉通り、2人の体は先ほどよりも沈んでいた。

「関係ねえよ！オメーを見殺しに出来るか！！」

「……お前らが先に沈むと困る。」

「え！？」

「お前らが先に沈むと困る……と、言ってるんだ。これ以上は動くな。」

「飛影……！」

「飛影あんた……！」

飛影は、顔を上に上げる。顎まで来た闇沼から逃れるように上を見ながら言った。

「……お前らは絶対に沈むなよ……！」

飛影の言葉に、幽助もぼたんも胸が熱くなる。

俺がいけなかったんだ……！

俺が飛影の忠告を無視して、畏があること忘れて……！

なのに飛影は……！

“……お前らが先に沈むと困る。”

なのになんで……！

“……お前らは絶対に沈むなよ……！”

——なんで普段は絶対言わねえ……

(優しいこと言うんだよ！？)

「ふざけんな！！」

そう叫ぶと、絡みつく沼からガバッと体を上げる幽助。